

# 図書館だより

戦争と平和

令和五年九月吉日・第百号  
成田高等学校図書委員会発行

(表紙イラスト：3F大須賀朋華)



## 「戦争と平和」について

地歴科主任教諭 神崎聡

近うて遠きもの 宮のべの祭。思わぬは  
らから、親族の仲。鞍馬のつづらをりと  
いふ道。師走のつごもりの日、正月のつ  
たちの日のほど。

遠くて近きもの 極楽。舟の道。人の仲。

（清少納言・一九九七年『枕草子』）

新編日本古典文学全集・（株）小学館

今から千年ほど昔、清少納言は「枕草子」  
にこう綴っています。日本人の私たちにとっ  
て「戦争」や「平和」も「遠くて近きもの」「近  
うて遠きもの」に当たるのではないでしょ  
うか。

私たちの考える戦争へ遠くて近きものとは  
何か。例えばロシアとの北方領土問題。ど  
こか遠い場所での国境問題と考えがちです  
が、ロシア（サハリン）は北海道本島最北端の  
宗谷岬と約四二キロメートルしか離れてお  
らず、その間は東京駅から千葉駅の距離と  
同じくらいです。実は近い国なのに「遠い」気  
がするのはなぜでしょうか。隣国が起こした  
ウクライナ侵攻や民族が分断された朝鮮  
戦争も然りです。原爆についても同じことが  
言えます。広島・長崎の記憶が遠くの中、世  
界で唯一の被爆国は我が国です。戦争のな

い世界を考える上で、遠く昔の原爆の歴史  
を再確認し、そこから身近な平和を再考察  
することが私たちにとって大切なのではない  
でしょうか。同じ敗戦国であるドイツでは、  
二度の世界大戦を反省し、その教訓から平  
和機関「E.U」を設立し、ヨーロッパ統合を  
実現しました。戦後、ドイツのヴァイツェカ  
ー大統領（当時）はこう述べました。

過去に目を閉ざす者は、結局のところ

現在にも盲目となります

（リヒャルト・フォン・ヴァイツェッカー（永井清彦）二〇〇九年

『荒れ野の四〇年』岩波ブックレット（株）岩波書店



（広島平和記念資料館から見る  
原爆死没者慰霊碑・原爆ドーム）

教訓は、過去  
の過ち＝歴史か  
らしか得られま  
せん。唯一の被  
爆国という過去  
と向き合うこと  
で、これからの平  
和を模索する。  
歴史を学ぶ私た  
ち日本人にこそ  
出来ることが必  
ずあるはずで  
す。私たちの求  
める平和へ近う  
て遠きものとは  
何か。平和とは

争いの少ない日本社会で身近に感じる存在  
ですが、世界平和への思いを馳せるまでには  
程遠いようです。世界では人権問題や領土  
問題、経済格差に端を発した戦争が日々繰  
り返されています。

誰もが平和を望むのに、いつもそれを壊  
してしまう人間が現れ、どれだけ努力すれ  
ば永続的な平和が得られるのかというやり  
きれない思いを、人類は何度も味あわされ  
てきました。そんな中、平和を語るのには理  
想主義だという言い方があります。「理想」  
がまだ実現していないことを望む「遠くのも  
の」だという意味において、それはその通り  
かもしれませんが。しかし、まだ実現はしてい  
ないけれど、誰もが欲し、誰もが失いたくな  
いものであるなら、やはりその希望について  
考え続け、学び続けなければならぬので  
はないでしょうか。

平和を考えることは、中高生にとつても  
間口が広いものであること。そのどれもがあ  
きらめて放り出してはならないものであるこ  
と。必ずしも私たちが互いに分裂せずに「共  
に考える」ことができる問題は数多くある  
こと。常に「戦争と平和」は「近きもの」であ  
り、それは時代や空間超えても変わらない  
確固たるもの。私はそう信じています。

終わりに、戦争と平和を一人でも多く  
の人々に再認識して頂くきっかけになれば  
幸いです。



## 『原爆の図 丸木美術館』を訪ねて

図書部長 吉田純子

細い道を抜けて、民家の奥の川のほとりにひっそりと建つ私設美術館「原爆の図 丸木美術館」を訪れました。画家の丸木位里、丸木俊が開いた美術館です。



丸木夫妻が描いた「原爆の図」は様々な形で日本全国を巡り、成田市でも展示されたことがあります。原爆投下は必要であったという意見もありますが、本当にそうであったのかは、広島・長崎でしか感じることはできません。作者は原爆投下直後の広島を実際に訪れ、その後長い年月をかけてこの絵を描いていきました。とにかく、この絵の前に立ってほしいと思います。美しさを感じるか、儚さを感じるかは人それぞれでしょう。原爆投下の結果をありのままに感じ取ってください。

## 『炎と灰のモンタージュ』尾形純展

三B 木内唯華



二〇二三年三月二十九日、埼玉県にある丸木美術館の特別展「炎と灰のモンタージュ」を鑑賞しました。作者のお母さまが見た東京大空襲の情景を描いた作品の企画展です。まず目に入ったのは、大きな赤い絵でした。真っ赤に塗られた絵具には、東京の街を燃え盛る炎で焼いていく様子がうかがえます。また、空の黒さとの対比も印象的でした。焼け野原になってしまった東京の街の絵もありました。灰色の濃淡だけで描かれた絵からは、どこか静けさと、寂しさを感じさせます。見学に行った時に、作者である、画家の尾形純さん(写真)と、お話をする機会をいただくことができました。この作品を作る際、「何度も色の試作をし、母が見た記憶の色を再現していった」とのことでした。

今回、葉牡丹祭の開催に合わせ、「原爆の図」の一部を展示します。原爆投下の事実とその意味を考えながら見てほしいです。

## 『経済・戦争・宗教から見る 教養の世界史』

教養の世界史

著者 飯田育浩 発行 株式会社

三A 大津照良



皆さんは宗教戦争や宗教紛争を知っていますか？宗教戦争とは宗教上の問題が原因で生じた戦争や紛争のことをいい、互いの宗教の価値観が相容れない場合、少数派の宗教が差別されている場合、信教を理由に処罰される場合、多数派の宗教に改宗された場合に起こることが多いと言われています。そんな宗教戦争にも二種類タイプがあります。

一つ目は「異なる宗教間・宗派間の戦争」です。異なる宗教間の教えなどの違いから起こってしまう戦争のことを言います。二つ目は「政治対宗教の戦争」です。このタイプは政治側が政治側の都合で宗教側の自由を弾圧すること(宗教弾圧)により起こるものと、宗教側が宗教上の思想や理念を政治側に干渉することでおこるものに分けられます。人の考えは自由であるはずなのに、関わらずなぜ宗教間で争いが出てくるのでしょうか？その理由としては諸説ありますが相手の宗教が受け入れられない、信者

等も相手側に行つてしまふことなどによるものが多いそうです。そもそも神や仏を信仰し平和に過ごすためにその宗教に入つたはずで、これでは本末転倒じゃないでしょうか？そもそも「平和」とは、「戦争がなく穏やかであること（広辞苑・二六三〇頁）」と書かれています。お互いにお互いを受け入れて、争いが無くなることを願うしかありません。

### 『図説 成田の歴史』

〈編集〉成田市史編集委員会発行〈成田市

三A 四柳照互



皆さん、成田山新勝寺が建てられた理由について知っていますか。それは、「平将門の乱」

です。平将門の乱が起こり、朝廷は命に従い、九三九年に寛朝大僧正が京都の神護寺というお寺の空海が作ったとされる不動明王像を奉じて下総の国公津ケ原へ入り、成田に朝敵調伏を旨とする不動護摩供を奉納しました。そして、平将門が流れ矢にあたり戦死した後、寛朝大僧正が京に帰ろうとしても不動明王が動きませんでした。その時に寛朝大僧正が不動明王の声を聞き、『私はこの地の穢れを払いきっていないため、この

地を動くつもりはない』と言つたと伝えられています。そのため、寛朝大僧正が公津ケ原にて東国鎮護の霊場を拓くべきとの考えのもと、成田山新勝寺を開山させました。これが成田山新勝寺建立の始まりです。

このように建てられた成田山新勝寺ですが、戦国期の混乱の中で荒廃し、寂れ寺となっていました。しかし、江戸時代に入り世情が落ち着くと伽藍が再建・整備され、江戸から近いこともあり参拝客が増えます。また、初代・市川團十郎が跡継ぎに恵まれず、成田山で子授け祈願をしたところ、待望の長男を授かり、不動明王を演目にした歌舞伎をたびたび上演、屋号も「成田屋」になりました。これもあり、更に成田山詣出が盛んになります。



日清戦争身代り札霊験の額(明治28年) 当時、成田山の守り札は「身代り札」とよばれ、出征軍人の間で愛された

(日清戦争身代り札霊験の額・成田山霊光館)

ところで、昨年完結した漫画「ゴールデンカムイ」は日露戦争(一九〇五年)の頃の北

海道が舞台です。私も北海道出身なので、読んでいたのですが、ふとその頃の成田山新勝寺について調べてみたら日清戦争(一八九四年)の頃から戦時中には「身代り札」が

「鉄砲玉から身を守る札」として、出征軍人の間で人気を集め、どんどん有名になっていき、今は光明堂や釈迦堂を始め、国の重要文化財(成田山新勝寺ホームページ参照)に指定され、寺院建築を知る上で大きな役割を担っています。

戦がきっかけで造られた成田山新勝寺ですが、今では平和を祈願する場所として多くの人が来ています。

### 『ときめき百人一首』

〈著者〉小池昌代 〈発行〉(株)河出書房新社

三B 木内唯華



君がため  
惜しからざりし  
命さへ  
長くもがなと  
思ひけるかな

(藤原義孝・百二十二頁)

あなたと思いが通いあうなら、惜しくなかつたわが命。けれど今は惜しいのだ。ああ、長くあれと祈るのだ。こうして思いを遂げた今、生きる喜びに満たされた今は。

(ときめき百人一首より引用)



この歌は後朝の歌と呼ばれ、平安時代、男性から女性へ想いを伝えるために贈られた熱い恋心を詠んだ歌です。この歌は恋が成就する前と後とで、気持ちが百八十度変わっています。恋がかなった今は長く平和に生きていたいという作者の気持ちは、現代の私たちの心にも何か通じるものがあるような気がします。

作者、藤原義孝は天然痘のため二十一歳という若さでこの世を去ったそうです。そう考えるとこの歌の「命」という言葉が、一層、心に深くしみる気がします。

世の中は 常にもがもな 渚漕ぐ  
あまの小舟の 綱でかなしも

(鎌倉右大臣二百十六頁)

世の中は、いつも変わらずにあつてほしいよ。波打ち際を漁師がゆく。その手がひく小舟の先の綱の悲しさ。

(ときめき百人一首より引用)

時は戦国時代、征夷大將軍となった実朝が、陰謀渦巻く政界の真ん中で生きていた時、平穏な日常を見て、いつまでもこの日々が続けばいいのと思ひ詠んだ歌です。この後実朝は右大臣に上り詰め、その翌年に、頼家の子に暗殺されてしまいます。その悲劇の予感までをこの歌に込めているとすれば、より一層、実朝の悲しみを伺うこと

ができます。

もし今、私たちが歌で気持ちを伝えようとすれば、どのような歌になるのでしょうか？ 世界には様々な状況下で生きている人がいます。毎日ご飯が食べられる人、戦場に駆り出される人など、様々です。平安時代も同じです。その時々、生きていた人が自分の気持ちを歌にして残してくれています。ぜひこの本を手にとって、自分の気持ちと共感できる人を探してみたいかがですか？

## 『百人一首解剖図鑑』

著者 谷知子 発行 株式会社エクスタレッツ

三B 室井咲蘭



百人一首は、藤原定家とその息子である為家の義父・宇都宮頼綱に依頼されて、嵯峨

中院山荘の襖に貼る和歌を選んだことに始まり、百人の歌人の歌を一人一首ずつ選んで色紙和歌にまとめたとされています。通称「小倉百人一首」と呼ばれているのは、定家の京都小倉山荘が由来であると言われています。

百人一首と聞くと「恋の歌」のイメージが強く、「戦争と平和」とは結びつきがないよ

うに感じる人も多いのではないのでしょうか。実際に、百首のうちの四十三首は恋がテーマの歌です。『ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは』(在原業平朝臣・五十頁)や『忍ぶれど 色に出でりけり わが恋は ものや思ふと人の問ふまで』(平兼盛・八十八頁)などは、百人一首の歌を全く知らない人でも一度は聞いたことがあるでしょう。競技かるたの選手の中でも得意札として狙っていたりすることが多く、代表的な歌です。

しかし、百人一首は恋の歌だけではありません。他にもたくさんテーマで詠まれた歌があり、「戦争と平和」に結びつく歌人や歌は少なくありません。歌人たちは、戦いや争いに巻き込まれていく中で、状況を自らの心情を踏まえて歌を詠みました。

『世の中よ 道こそなけれ 思い入る 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる』(百五十四頁)。八十三番の皇太后宮大夫俊成(藤原俊成)という藤原定家の父親にあたる人の歌です。意味は、「この世の中には逃れる道などないのだなあ。一途に思いつめて入ったこの山の奥にも、鹿が悲しげに鳴いているようだ。」です。この歌が詠まれた当時、争いが頻繁に起きたことにより、世の中が混乱していました。それから逃れるために出家しようとした作者の心情が詠まれています。

このように、他にも百人一首の中には「戦

争と平和」に結びつきのある歌が他にもあります。百首全てにイラストや歌人の人生などが載っているため非常に読みやすく、歌意や詠まれた背景が理解しやすいです。「戦争と平和」を違った観点から考えることができるので、ぜひ手にとって欲しいです。

## 『池上彰の』

### 君と考える戦争のない未来』

著者 池上彰 発行 株理論社

三C 大曾根陸人



二〇二二年二月二四日、ロシアがウクライナに侵攻を始めた。ウクライナは養分のバランスが良

い土壌であることから「ヨーロッパの穀倉地帯」と呼ばれている。特に小麦やトウモロコシの生産が盛んであり、世界各国へ輸出をしていたが、侵攻が始まったことで輸出することが難しくなった。輸入していた国々では、物価が上昇するなど影響が出始めている。たとえば、有名チェーン店であるマクドナルドやミスタードーナツなどの穀物を使うお店で値上げしていることがわかるだろう。しかし、穀物などを使うのに値上げをしていないお店もある。サイゼリヤは値上げをしてい

ない(令和五年三月現在)。仙台にトマト工場、オーストラリアに自社工場があるのでウクライナやロシアからの輸入に頼っていないことが理由の一つだ。しかし、サイゼリヤ一社が好調でも私たち日本の暮らしが安泰になるわけではない。影響しているものは食物だけでなく対ロシア制裁措置により燃料や他の資源にも及んでいる。戦争が起きるといふことは世界中をまきこむものであり、前文はこの本の序文にすぎない。他には戦争のきっかけや目的、第二次世界大戦や紛争などと過去に起こったことも書かれている。

本のソデ紹介文には「自国ファーストではなく、地球ファーストで物事を考えれば、結局は地球上の私たちすべてにプラスになる」とある。少しでも知りたい人はこの本を読んてみたらどうだろうか。

## 『図説 北欧神話大全』

著者 トム・バークット

訳者 井上廣美 発行 原書房

三C 高橋和也



戦争は現実でも起こっているが、神話の中でも起こっている。また神話が戦争と関することも

ある。本書では北欧神話での出来事、世界

観、神々、登場する生物などが写真や絵などを使って視覚的に訳文を十二章構成で説明している。北欧神話では誰かの伝説や少数の戦いがほとんどであるが、神話の最後に北欧神話で戦争と言えはこれという「最終戦争ラグナロク」という戦争がある。本書では第十一章で記載されている。詳しい説明は省かせてもらうがこれは「神々対巨人」の戦いであり世界が崩壊しかねないものだ。戦争の発端は主神オーディンの息子バルドルが巨人ロキによって殺されたことだ。結末は本書を是非手に取って確かめてほしい。

また第十二章では伝承と解釈について述べられており、現在に北欧神話が伝わり続ける過程に現実の戦争と関わってきているという記述がある。例えば北欧神話の大半は中世のアイスランドで書かれたものだが、総合的に見るとアイスランドはキリスト教を公的の宗教としたため今まで北欧神話の神々を信仰していた人々が内戦を避けるためにキリスト教に改宗したと述べている。また、北欧神話は捻じ曲げられナチス・ドイツの文化的闘争の道具となっていた。北欧神話の暴力、男性の英雄的行為の協調、個人の力の賛美など魅力的なところだけを利用していった。そのほかにも神話内に登場するナチス親衛隊などの軍事組織の記事に利用されたり、北方ゲルマン民族の優位性とユダヤ人をはじめとする多民族の退化を「証明」するた



めにもつかわれた。これによって北歐神話はナチスの恐ろしいイデオロギーの構成要素になったと述べられている。

最後にこの本は戦争という重たいテーマに触れづらい方に読んでもらいたい。神話という物語に近いことや登場する神々などが聞いたことのある名前だったりするので、実際の戦争よりは気軽に戦争というものに触れることができると思う。戦争について学ぶ最初の一步にしてもらえたら幸いである。

## 『なぜ自爆攻撃なのか』

### イスラムの新しい殉教者たち』

著者▽ファルハド・ホスロヴァール

訳者▽早良哲夫 発行▽株青灯社

三D 阿久津綾



みなさんは、イスラム教徒の自爆攻撃について知っているでしょうか。このイスラム教徒の

自爆攻撃でとても有名なものは、二〇〇一年に起きたアメリカの同時多発テロです。このテロの容疑者はイスラム過激派のアルカイダであり、被害者は二万五千人にものぼりました。その被害者の中には日本人もいました。そして、インフラ被害、物的損害に加

えて、長期間にわたる健康被害が発生しました。では、なぜそのような命を捨てるような行為をしているのか。まず、自爆攻撃は大きく二種類のタイプに分けられるといわれています。一つ目は、イランやパレスチナなどの国家建設にかかわり、明確な目的と敵をもちながら、困難に直面した挙句、聖なる死を選ぶ古典的なタイプです。そして、二つ目は、近年のグローバル化によって国家に対する意識が変化し始めた時代の産物であるアルカイダなど、国境を越えた新しいイスラム共同体を目指した具体的な構想がない殉教です。殉教とは自らの信仰のため命を失ったとみなされる死のことです。私たちがイスラムの殉教者が自爆攻撃をする理由を考えるとときに重要なことは、イスラムで現在に至るまでにどのような事件が起こり、その事件はイスラム教徒をどのような思想に発展させたのか、それを理解することです。

この本では、著者であるフランス国立研究院教授のファルハド・ホスロヴァールがそのときに起こった殉教の具体的な事件や紛争などの例を交え、当時のイスラムと政治、権力、殉教者との関係について考えてどのような影響が出たかなどを詳しく説明しています。そして、殉教者、すなわち信じる宗教のために命を捨てる人たちが、増えてしまう原因にも言及されており、要点がわかりやす

くまとめられています。

イスラムに関して少しでも興味を持つている人やアメリカの同時多発テロなどの自爆攻撃による事件について詳しく知りたいと思っている人にはおすすすめの一冊です。

## 『建国神話の社会史』

### 史実と虚偽の境界』

著者▽古川隆久 発行▽株中央公論新社

三D 小原みつき



「古事記」「日本書紀」、この二つの名は誰しも聞いたことがあるだろう。今では、古事記や

日本書紀は史実ではなく文学書とされている。それは、戦前の普通の人々にとっても、歴史的事実ではないということとは当たり前のことだった。その一方で、戦前ではそれら建国神話が、あたかも史実であったかのようにならされてきたこともあったという事実もある。それによって、日本は戦争へ向かってしまうこととなる。

本書には、そのような矛盾がどのように起きて、どのように戦争に向かい、そして現代にどう繋がっているのか記されている。政治、経済、学校教育現場など様々な場所を

通して、戦争に向かう経路、戦中の状況、そしてそれらは現代にどのような影響を与えたか等、章ごとに順序立ててあるのでとても分かりやすい説明となっており、誰にでも読みやすいようになっている。

この本によると、かつて、建国神話は社会において、政治の民主主義化や国際交流を拡大させてくれるような良い役割も持ち合わせていたのだという。しかし、社会の変動とともに、一般社会では国民の国家への動員を強めるために建国神話を事実化し、利用されるようになってしまう。やがて、それは戦争へ向かわせるための論拠のひとつにされてしまったのだ。

虚実が史実とされるようになってしまったということとは、昔にあったことだと割り切ることはできない。戦前に、嘘の事実であるものが史実であるとされてしまったように、戦後の現代でも、虚偽と史実が曖昧になってしまふものが多くあるだろう。むしろ、インターネットの発達によつて、誰でも情報を発信できるようになったため、今は昔よりもずっと虚実の境界線がわからなくなっているものが増えている。それを判別するためにもメディアリテラシーを身につけなければならぬとよく言われるようになってきている。このように、現代でも虚実が史実とされてしまうことが起きる可能性は十分にある。この本は戦争を知ることができるだけでなく、現代

を生きる私たちについても見つめ直すことができるかもしれない本だ。

この本を読んで、戦争に対して、昔にあったことだからといって無関心でいるだけでなく、現代に生きる私たちもこのような事実を通して考え続け、そして、平和をずっと守り続けていかなければいけないと思った。

## 『比叡山の僧兵たち』

鎮護国家仏教が生んだ武力の正当化

著者 成瀬龍夫 発行 サンライズ出版(株)

二〇二〇 浅井こはる



日本の中世社会において大きな影響力を持っていた寺社勢力。その中でも特に抜きん出

た存在であったのが、天台宗総本山、比叡山延暦寺である。宗教的権威としてのイメージが先行しがちだが、実は政治的・軍事的にも、朝廷や幕府、そして武士にとっては時に厄介な一大勢力だったのだ。そして、そんな比叡山の軍事力を担ったのが、僧兵である。「僧兵」と聞くと、刀を携えた坊主頭の僧侶を想像するかもしれない。しかしその姿こそ、本書のテーマにもなっている、ある大きな矛盾が隠されている。ここで思い出される

のが、仏教の戒律の中でも「第一重戒」として守るべきとされている、不殺生戒、「いかなる生き物も殺してはならない」というものである。

「日本仏教の母」とも言われる天下の延暦寺。その僧侶が、戒律の第一に置かれる不殺生戒を破り、僧兵と化して刀を振るい、人を斬っていたのだ。ネタバレをしてみましょうと、そういった僧兵の存在、また彼らによる武力行使の歴史は、当の比叡山延暦寺はもちろん、多数の歴史研究者たちにより、正当化されることが多い。つまり、「戒律を破つても武装することには、やむを得ない事情があった」ということである。ではその「やむを得ない事情」とは一体何だったのか。

本書では、織田信長による比叡山延暦寺焼き討ち事件を皮切りに、多くの資料に基づいた考察が展開されている。そもそも寺院が一つの機関として政治に影響を及ぼしたり武力を行使したりするというのが、現代を生きる私たちには理解しがたいかもしれない。私たちの知る寺院は、兵士が潜んでいたり、敵対する寺の鐘を盗んだりする物騒な存在ではなく、おみくじを引いたり屋台のチョコバナナを食べたり、新年に「すべてうまくいきますように」などと不躰な願い事をしてみたりする(筆者)、「なんとなく神聖そう」な平和な場所だからだ。

余談はさておき、筆者は悪天候により修



学旅行で延暦寺を訪れる夢が叶わなかったのだが、修学旅行から戻り本書を読み終えた今、「あの時行かなくてよかった」とさえ思っている。その土地に刻まれた血と火の歴史を知らずに参拝するのは、あまりに惜しいからである。

皆さんにも、この本を読み、ぜひ比叡山延暦寺を訪れてほしい。(延暦寺の回し者ではない)歴史という、常に不確実性が伴う題材を扱った本書では、様々な説が飛び交うそれらを踏まえ自分なりに推察をしながら読んでみると、本書をより一層楽しめるのではないかと思う。

## 『黒い雨』

〈著者〉井伏鱒二 〈発行〉(株)新潮社



三F 杉本音乃花

皆さんは『黒い雨』と聞いて何を思い浮かべますか。黒い雨は核爆発で生じた放射性物質と、高温により燃焼した家屋などが強い上昇気流に乗って空に舞い上がり、それを含んだ雨雲からの雨のことを言います。その特徴的な色は樹木の灰が溶け込み、黒い雨と呼ばれているのです。その強い放射能を持つとても危険な放射性降下物は、広島で原子爆

弾爆発から二十分後頃から降り始めました。この雨に濡れた人や、雨で汚染された水を飲んだ人に放射線障害をもたらしました。今回紹介する『黒い雨』は原子爆弾が投下され、阿鼻叫喚にあふれ地獄絵図と化した当時の広島の様子が淡々とした語り口で書かれています。そのため自分の曾祖父や曾祖母から昔話を聞いているように感じ、自分事として考えさせられる文章です。

私が一番心に残っている言葉は登場人物の重松の言葉で、「戦争は嫌だ、勝敗はどちらでもいい、早く済みさえすればいい。いわゆる正義の戦争よりも不正義の平和の方がいい。(一七〇頁)」です。近年の世界情勢は戦争にあつて、今でも苦しんでいる方々がたくさんいることを思うと戦争は絶対にしてはいけないことだと改めて感じました。昔のこと、遠い国のことだととらえずに将来自分たちはどうするべきなのか考えることができました。

私の住んでいる地域も昔は軍学校だったそうです。今でも大砲を撃っていた山がそのまま残っており、小さいころから日本でも戦争があったことを実感できる環境にいました。しかし、去年の十一月に修学旅行で広島平和記念公園を訪れた際には未知のものを見ている気分になりました。やはり、原子爆弾によって一瞬で大勢の人が亡くなり、負傷された方が眠っているその地に立つと言

葉ではとても言い表せないような恐怖感や私たちが何不自由なく暮らせていることの感謝があふれてきました。広島ピースボラントニアの方がおっしゃっていた「日本の未来は私たちにある」「平和とは何か」というお言葉が『黒い雨』でも感じた、「私たちはこれからどうするべきか考えていくことが大切だ」ということをこの修学旅行でさらに深く考えることができました。

## 『火垂るの墓』

〈原作〉野坂昭如 〈発行〉(株)文藝春秋



三F 大須賀朋華

「火垂るの墓」。皆さん一度は観たり聞いたり読んだりしたことがあるのではないのでしょうか。スタジオジブリの作品の一つでもあることで有名です。かくいう私も小学生の時、友達に教えてもらい観たのがきっかけです。「火垂るの墓」は作者である野坂昭如が自身の戦争体験をもとに書いた短編小説です。戦火の下、両親を亡くしてしまったため叔母に引き取られることになった兄弟が、その叔母とも不仲になってしまい、家を出ていくこととなります。十四歳の清太と四歳の節子が終戦間近の世を生き抜こうとする物語です。

私がこの書籍を紹介するにあたって思ったことは小学生の頃と感想が違うということです。小学生の時は清太たちのお母さんの着物を勝手に売ったり、ご飯の時には二人の分だけ少なめに盛ったりなど、叔母さんが意地悪をしているように見えたのですが、戦時中の暮らしの過酷さを知った今、改めて読んでみると戦時中に自分の子供を育てるだけでも大変なのに清太たちを自分の家におき世話をしあげている、それだけでも優しいと思いました。対して清太に思ったことは、叔母さんたちとご飯を別にしたり、防空壕で生活している時にご飯を炊いている描写があったので多少なりとも叔母さんの手伝いができたはずで、そうすれば家での二人の立場も違っていたのではないかということ、また防空壕で暮らし始めてしばらくたち、食料が尽き農家のおじさんのところへ行き食料を分けてもらおうとして断られた時に言われた「叔母さんに謝ってもう一度住まわせてもらった方がいい」という助言も無視して防空壕に住み続けてしまった、つまり清太が周りの人たちと協力をしないで生き抜こうとしたがために節子は死んでしまったのではないかということです。

この書籍は映画を元にしてるので、戦争によつて負傷してしまった人たちの怪我の具合や節子たちがどのような場所で命を繋いできたか等がフルカラーのコミックで描かれ

分かりやすく戦争の状況や過酷さについて知ることが出来ます。もしまだ読んだことがないのなら手に取ってみてはどうでしょうか。

## 『同志少女よ、敵を撃て』

著者 逢坂冬馬 発行 株 早川書房

三下 小山陽菜乃



本書は第二次世界大戦の独ソ戦を舞台にしたミステリー戦記物語です。

主人公のモスクワ近郊の農村に住む少女・セラフィマは母と村人たちをドイツ兵に惨殺されたことをきつかけに軍の女性兵士に助けられて、一流の狙撃手になることを決意。訓練学校で出会った同じ境遇で家族を喪い、戦うことを選んだ女性狙撃兵とともに前線へと向かい「真の敵」を目にします。

日本人にも深い関りを持つ第二次世界大戦を主人公・セラフィマを通してロシア(ソ連)の立場から見るとは新たな視点を得る新鮮な体験になるでしょう。本作は実在の人物も登場しつつ、主要な人物たちは架空のキャラクターであるフィクションです。ですので、最近、歴史ものに興味を持ち始めた人や読んだことがなかった人にも、少女の成長

譚という読みやすい作品で、歴史小説への第一歩としておすすめできる作品だと思います。また今回のテーマは「戦争と平和」ということですが、戦争の悲劇と一口に言っても沢山の要素が含まれます。

本作では同じ境遇であっても民族の違いから異なる考えを持つ隊員同士の衝突や、米露間での戦争中の女性の仕事の違い、敵国の女性が同国の兵士に蹂躪されるシーンをその時代を生きる少女の臨場感あふれる目線から読み進めていくことで戦時中における民族差別や特に女性の立場、女性問題の悲慘さを感じることが出来ます。

この作品は一貫して「敵とは一体何なのか」を問い続ける物語です。タイトルの通り、少女は敵を撃つために奮闘します。自分の敵は誰なのか、その問いに明確な答えを持つことは難しいでしょう。それでも思考を放棄することなく「戦争と平和」という大きなテーマに対してまた新たな考えを自分の中に持つということが大切であると感じさせてくれる作品であると思います。

戦争とは何か、どうして起こるのか。平和とは何か、平和を一体どんな敵から守ればいいのか。昨今、問題となっているウクライナ情勢の渦中の国であるロシア人の少女が主役である本作を通して新たな視点から考えるきっかけの一つになると思います。



## 『ひろしまのピカ』

〈文・絵〉丸木俊 〔発行〕株小峰書店

三G 大田絢子

『一九四五年八月六日、午前八時十五分、ピカツという恐ろしい光が、広島のを空をつらぬきました。それは、人類はじめての原子爆弾でした。かぞえきれないほどのひとびとがしに、きずつきました。7さいのみいちゃんは、おかあさんに手をひかれながら、じこくのまちをにげまどいます。』(そで紹介文より引用)



そんな原子爆弾が落とされた後の物や遺品、様子を広島平和記念資料館で撮った写真を添えて紹介します。

一つ目は、原子爆弾によって大火災が発生し変形したガラス瓶です。他にも、お弁当箱や水筒、溶けた一升瓶に溶けた仏像、八時十五分で止まった時計などもありました。

二つ目は、一九四五年八月九日の広島市内を歩く人々の写真です。被爆後も放射能が地上残り、救援活動や肉親の捜索のため広島市内に入った人々に影響を及ぼしました。



(上・変形したガラス瓶 下・市内を歩く人々)



広島平和記念資料館

三つ目は、爆心地から九百メートルの小網町の建物疎開作業現場で被爆(放射線にさらされること)し、亡くなった三人の中学生が身につけていた衣服です。三人の遺品の衣服は、後ろの部分がよりひどく焼けてポロポロになっていました。ちなみに、一度に大量の被爆をした場合、血液障害や消化管障害などの急性放射線症になることがあります。これは、被爆後数日から数週間発症します。亡くなった三人の中にも急性放射線症と思われる人が居ました。

また、広島平和記念資料館に行った後にすぐ近くにある平和記念公園でガイドさんに教えてもらい驚いたことを紹介したいと思います。平和記念公園は埋め立てられて作られており地面の下には当時の瓦礫や小

さな遺骨が眠っていること、また、慈仙寺の墓石という物があるので被爆の強烈な爆風により墓の一部が散らばっており、周りには池の様にへこんでいて元の土地の高さが分かります。



(中学生が身につけていた衣服)

広島平和記念資料館

最後に、この絵本には「二度と繰り返してはならない」という願いが込められています。私もこの文章を書きながら二度と核兵器を使った争いが起きてはいけなさと再確認出来ました。



### 『愛国百人一首』

著者 川田順 発行 (株)河出書房新社

三G 平山創



は一首ごとの説明、全体的な歴史背景の解説との二部構成で、詳しく書かれています。

大君は 神にしませば 天雲の

雷の上に 慮りせるかも」

(天雲…あまぐも、雷…いかづち、慮り…いほり)

この歌はかの有名な柿本人麻呂の詠んだ歌です。句の詳しい解説は本書を読んで頂くとして、この歌がなぜ戦争の翼賛運動と関係があるのか、本書の言葉を引用しながら説明します。

大君(おおきみ)は現御神(あきつみかみ)、この世に人間の姿で現れた神、つまりは天皇のことを表しています。簡単に訳すと「天皇は神であられるので雷岳(地名)の上に(仮の)宮をも御作りになされる」といった意味です。天皇の御威光を知らしめている歌となっています。この歌は実際には小さな丘である雷岳を大袈裟に書いてあり、天皇というより

は柿本人麻呂が偉大である、と今では解釈される句です。

このように、本書は軍国主義と称されていた日本の教育方針を裏付けるかのように、歌の意味が天皇への尊敬・愛国主義などを唱えていると解釈できるもの、また軍人が詠んだ歌などで構成されています。

軍人の詠んだ歌と言いましたが、どのような人がいたのでしょうか？例えば夏目漱石の「こころ」でも間接的に出てきた歴史のキーパーソン、乃木希典將軍です。明治天皇の崩御の後、殉死したというのはあまりにも有名な話ですが、この方も名歌を残しています。歌番号は百番、最後を飾る歌になっています。ぜひ自分自身の眼で確認ください。話は変わり本書の解説に面白いものがあったので最後に一句紹介致します。

しきしまの やまと心を 人とはば  
朝日ににほふ 山ざくら花

この歌は本居宣長によって詠まれた句ですが、英語訳が存在する短歌です。文芸評論家の島内景二によると、うまいのか、そうでないのか判断できないと言われてしまっています。短歌としての魅力は再現されているものとなっています。愛国百人一首が日本のみならず他の国の人たちにまで伝わるといふのは、短歌としての魅力を海外に伝えて

いけるだけでなく、戦時中という異常事態の中誕生した新たな日本文化であり、今となつては歌を通して戦時中と歌の詠まれた当時の二つ歴史を感じることでできる唯一無二の文化を他の国の人達と共有できるということだと思います。今後も翻訳が積み重ねられることを期待しています。

本書ではこの他にも素晴らしい歌や興味が惹かれる素晴らしい解説が一杯に詰まっています。ぜひ手に取り、様々な歴史に思いを馳せてみてください。最初に後半の解説を読んでみた後、有名な歌や解説で取り上げられていた歌などを読んでいくと読みやすく楽しいでしょう。

### 『いしづみ』

### 『広島二中一年生全滅の記録』

編者 広島テレビ放送 発行 (株)ポプラ社

三G 脇燐芽



一九四五年八月六日。広島に原子爆弾が落とされた時の出来事を広島第二中学校の生徒の中心に書かれています。この本のあとがきに、『いしづみ』という題字は、広島市公園にあ



る広島第二中学校の慰霊碑の一字をとったものですが、碑という字を辞書でひくと、「事跡を後世に伝えるため、文字を刻んで立てておく石(広辞苑)」と説明してあります。つまり、大きな出来事をのちの時代に伝えるために、石に文字を刻んで残しておく、という意味があるのです。』と、書かれました。広島第二中学校の慰霊碑には、この場所に原爆が落とされ、たくさんの方が亡くなったことを決して忘れないでほしいという思いと、戦争を二度と起こしてはならないという願いが込められているのではないのでしょうか？



〔上〕リトルボーイ「広島投下」 下「ファットマン」長崎投下  
広島平和記念資料館

広島に原子爆弾「リトルボーイ」を投下した飛行機は、エノラ・ゲイ号という爆撃機でした。エノラ・ゲイ号という名前は、搭乗していた機長の母親、エノラ・ゲイ・ティベツからとられたものです。母親の名前を付けた飛行機で原子爆弾を落とし、大人も子

どもも関係なくたくさん命を奪ってしまふなんて、とても残念で、とても悲しいです。現在、エノラ・ゲイ号はアメリカの Smithsonian 航空博物館に保存されていますが、原爆被害や歴史的背景についての説明は少なく、その展示方法に批判的な意見も存在しています。

原爆投下については、戦争を終わらせるために仕方がなかったという意見もあります。私は修学旅行の平和学習で、被爆者のお話を聴いて、仕方なかったでは済まずことはできない、言葉では言い尽くせない悲惨な状況だったのだと思います。他にも広島平和記念資料館では、原爆被害の非情さを、写真や物を見て感じる事ができました。さらに今でも原爆の後遺症で苦しんでいる人がたくさんいるのです。また、広島第二中学校の被爆した生徒の中には、東京などいろいろなところから空襲を逃れるために疎開してきた生徒が大勢いたそうです。安全だと思っていた場所でまさか原爆が落とされるなんて、とても残酷です。さらに驚いたことは、広島に落とされた原子爆弾は核爆弾の中では極めて簡単なものであったことです。もっと威力の強いものであればさらにたくさんの方の死者が出て、苦しむ人が増えたと思います。私はこんなにも恐ろしい核兵器は絶対にあつてはならないと思います。

私はこの本を読んで、改めて原爆がどんな

ものだったのかを考えました。広島第二中学校の一年生の約三〇〇名が、どのように命を落としていったのか、かなり細かく書かれています。「全滅」という言葉でまとめられています。もし「今」だったらと、想像してみたい。絶対「核兵器反対」と叫ぶでしょう。

## 『ガラスのうさぎ』

著者 高木敏子 発行 株金の星社

三戸 櫻井康陽



舞台は戦争末期の日本、東京に住む主人公敏子の家族は戦争によって離れば

なれになってしまいます。二人の兄は戦争で外地に派遣され、父も満州方面にいてほとんど帰つてこられない状況の中、敏子自身も二人の妹たちと一緒に地方に疎開することになります。ちなみに二番目の兄、行雄兄はこの当時十七歳でした。自分と同年の子ですら非国民になるのを恐れて戦争に行つていくことに私はとても当時の世の中の厳しさを感じました。またこのとき行雄が戦地に持つて行った物の中に、成田山新勝寺のお守りが出てきます。成田高等学校に通っている私たちにとってはこれもまたこの物語に入り込みやすくなる要素ではないでしょう。

うか。その後、東京大空襲やアメリカ軍による機銃掃射によって敏子は家族も家も失うことになりました。空襲後、敏子が実家を訪れると、実家の焼け跡からは溶けた状態の「ガラスのうさぎ」が見つかりました。これは江戸切り子の職人だった父が特別に作ってくれた置物でした。取り残された敏子は悲しみに打ちひしがれながらも、亡くなった家族のためにも生き抜こうと決意します。その後彼女がどう生き抜いていくのか。命の尊さと平和への祈りを込めた愛と感動の物語です。



(広島平和記念公園内・動員学徒慰霊塔)

この本は戦争の世を生き延びた高木敏子さんがその悲惨さを綴った小冊子『私の戦争体験』を元にして出版されました。つまり、この本の話はすべて事実なのです。自分はこの本を読んでいく中でとても悲しい気持ちになると同時に戦争の惨禍の下でも生きる希望を捨てずに生き続けた彼女の生き様に勇気を与えられたような気がしました。

また、自分はこの本を読む以前に広島平和記念資料館に行き、原爆の被災者の方の講演や当時の資料を拝見させていただくことがありました。その際、平和記念公園内での現地ガイドの方によるウォーキングツアーにも参加させていただきました。それらを通して当時の悲惨さや、戦争の恐ろしさを感じると共にこれらはいつまでも伝え続けなくてはならないことであり、決して忘れてはならない事だと思えました。この物語の主人公であり、この本の原作者である敏子さんも同じ思いでこの話を書いたのではないのでしょうか。

自分たちは戦争を実際に経験していません。なので少し他人事のように考えてしまっているのも仕方ないことかもしれません。ですが、当時の方々が残っていた遺物や本で思いを馳せることは出来ます。かつてこの国が経験した戦争が我々と遠い時代となり、その記憶が薄れゆく現代において、私たち若者がそれらに関心を持つことは大事なのではないのでしょうか。

## 『この世界の片隅に』

〈原作〉こうの史代 〈発行〉(株)双葉社

三戸 和田龍太郎

私がこの本を読んで感じたことは戦争系というよりは日常系の本だということです。



絵を描くことが大好きな主人公のすずの幼い頃、人々が機械にあまり頼らない生活を営んでいるところからスタートします。普通の女性の戦争真只中の日常や生活スタイルに焦点をあてています。天然ボケのあるすずが、家事をしている様はとて面白く、不便で物が無かった時代に、ご近所の人達と協力をして、助けあつて生きていきます。「バイオリンを奏でる様に(本文より引用)」仕事をするすずの様子は印象に残りました。また、この本には当時の戦艦や戦闘機などが日常生活と同じように書かれています。戦艦大和やB29など実際に使用されていたものの特徴も細かく表現されていて、対空遊撃用の高角砲には戦果を



(戦艦「大和」・呉市海事歴史科学館大和ミュージアム)

確認するために煙に色がついていることは初めて知りました。戦艦大和についてはかなり細かく書かれており、何回も登場するのに毎回異なる印象を受けました。初めはダイレクトに



登場してすずの視線を奪っていくのですが、最後は間接的に表されており、その後アメリカの猛攻撃を受け沈没してしまいます。

また、時限爆弾で右手を失ってしまうすずの、かつてあった日常もだんだんと崩れていくこととなります。すずの中にあつた美しい世界は歪んでいき、自己を完全に捨ててしまふのです。「喪失感」や「自己を無くす」という表現がとても痛々しく感じ、一番心に残っています。原爆投下の後、玉音放送を聞いたすずが段々畑で号泣をしようというシーンがあります。すずの「死にたかった」という一言が心に深く刺さりました。さらに、軍人さんが原爆などによつて皮膚などが溶けており、そのままの状態です。戻ってきたのに自分の親に気づいてもらえずにそのまま亡くなってしまうのもショックでした。

「当たり前前の生活」や「普通のこと」とは何か、「絶望」や「困難」などから立ち直つて「生きる」との意味を考えました。

## 『戦争は女の顔をしていない』

著者 スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ  
訳者 三浦みどり 発行 (株)岩波書店

二G 加瀬文乃

この本は第二次世界大戦でソ連軍の一員として従軍した女性たちのインタビューを収集したものである。ソ連では社会主義の男女



同権の思想の下、多くの女性が看護師や軍医としてのみならず兵士として武器を持つて戦った。本の中では二千万もの犠牲を出し、絶滅戦争と呼ばれた地獄の独ソ戦が、一兵士の、女性の目線を通して鮮明に描かれている。

現在、私たちが知る独ソ戦は戦史書籍から得る数字と情報動き回るマクロなものかロシアがプロパガンダとして流す栄光と勝利に彩られた味気のないものがメインとなっている。しかし、本書は泥と血、そして人間臭さのままに描かれている。女性たちは戦争を喜び、悲しみ、可笑しき、恥ずかしき、そして愛を交えて語るのだ。戦場の景色は私たちにとつて遠いものであるが、これらの感情は私たちにとても身近である。だからこそよりの私の胸をついた。これはただの戦争の記録ではない、地獄を生きた人間の言葉である。

私は日本での戦争が、またはより身近な領域での武力衝突がそう遠くないものだと思ふ。昨年の秋の共産党大会で一強体制を形作った習近平がこのまま勇退するとは思えない。彼は建国者毛沢東を超えるような輝ける業績を築き上げることを望んでいる。これまで以上に東アジアの不安定化は進んでいくだろう。私は考える。たとえ私た

ちがいくら平和を希求し、反戦の言葉を唱えたとしても次の戦争は否応なく海の向こうからやってくる。易々と平和を壊すだろう。私たちが戦争を繰り返さないのではなく繰り返させられるのだ。最早リアリティのない平和について無責任に語り合うだけの時代が終わり、日本が直面している東アジア情勢、その安定のための必要な機能、能力、政策、そしてそのすぐ近くにある有事についてより現実的に考えなければならぬ時代がやってくる。

しかし、現実として捉えようとした時の戦争はあまりにも巨大で漠然としていて、それを前にしてみると無力感さえ感じる。ならば私たちは戦争に対して本当に無力なのか？ いやそうでは無いはずだ。現在のウクライナ戦争では多くの民間団体や住民や軍の支援で活躍している。政府が拾いきれない細かいニーズを埋め、ウクライナのために活動している民間人が沢山いる。私は日本での有事の折にはそうした民間での動きに参加するつもりである。有事の際、これまでの先人たちの様にただ最寄りの駅で、五〇〇M先に届くか怪しい声で戦争反対と叫ぶのはなにも変えないだろう。しかし、より早く私たちの望む平和を実現するために私たちにできることは確かにある。それを今一度考えてみる。戦争と平和に向き合うということではないのか。

## 【編集後記】

ウクライナの輸出機能が滞っているという。攻撃や防衛のために敷設した機雷の除去が進まず、艦船の航行が困難になっている。また、ヘルソン州のカホウカ・ダムが決壊の影響で地上に設置された地雷が流され、黒海で漂流中に機雷と衝突する恐れがあるようだ。(新聞掲載記事参照)第二次世界大戦時、日本周辺の近海でも大量の機雷が敷設された。その時に培った海上自衛隊の掃海技術の活躍の場は海外にも広がる。「海中の危険物『機雷』は除去しない限り死なない」「MAMOR」より引用)。死なない兵器は今もなお深く残っている。

人々の心や体、また自然環境や経済に大きな影響を及ぼし、悲しみや憎しみなどの負の遺産を背負うことになる戦争は、人々の記憶から永遠に消えることはない。



(機雷・海上自衛隊呉史料館 てつこのくじら館)

## ▼参考書籍 (順不同)

- ・原爆遺跡保存運動懇談会『広島 爆心地 中島』(株)新日本出版社
- ・直野章子『「原爆の絵」と出会う』(株)岩波書店
- ・岡村幸宣『《原爆の図》のある美術館』(株)岩波書店
- ・中沢啓治『はだしのゲンはヒロシマを忘れない』(株)岩波書店
- ・中沢啓治『はだしのゲンはピカドンを忘れない』(株)岩波書店
- ・ハワード・ジン『爆撃』(株)岩波書店
- ・安斎育郎『ビジュアルブック語り伝える空襲第五巻 人類初の核攻撃』(株)新日本出版社
- ・桜林美佐『海をひらく 知られざる掃海部隊』(株)並木書房
- ・「MAMOR」令和四年十一月号・榊扶桑社

## ▼協力

- ・原爆の図 丸木美術館
- ・広島平和記念資料館
- ・海上自衛隊呉史料館 てつこのくじら館
- ・呉市海事歴史科学館 大和ミュージアム

## ▼学校図書館の発行者

- 『Bibliothek』
- 新着図書の中から、お薦めの図書を紹介。

## ◆毎週発行(揭示及び学校HP掲載)

## 『READ』

教職員のおススメの本を紹介。

## ◆毎月発行(揭示及び学校HP掲載) 『図書館だより』

テーマに沿って図書委員が取材、編集。

## ◆毎年九月頃発行(学校HP掲載)

## ▼令和四年(二〇二二)年度年間貸出冊数

- 中学生利用冊数：二、三三九冊
- 高校生利用冊数：二、六六八冊
- 小学生及び職員利用冊数：七二九冊
- 合計 五、七五六冊

(図書館蔵書冊数・五一、七八八冊)

## ▼図書委員・役員

- 図書委員長：高3H 和田龍太郎
- 〃 副委員長：高2G 村本武範
- 〃 副委員長：高1H 椎名紀仁

## 展示班

- 班長：高3G 平山創
- 副班長：高2F 山田健琉

## 蔵書点検班

- 班長：高3G 脇煌芽
- 副班長：高2G 横山慶大

## 図書館だより班

- 班長：高3B 木内唯華
- 副班長：高2G 加瀬文乃